

福島・かつらお村 アート活動のかわら版



スキコム

by KATSURAO COLLECTIVE

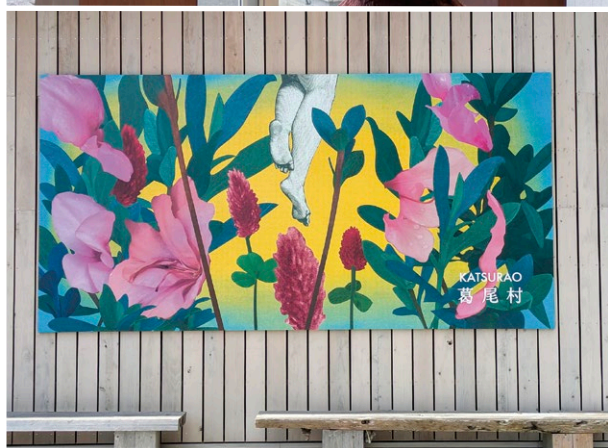
「スキコム by Katsurao Collective」は、葛尾村で活動しているアーティストたちの活動の様子をお届けするニュースレターです。畑に堆肥を鋤き込むように、地域に多様な価値観を混ぜ入れる活動の魅力をお伝えします。

葛尾村に思いを寄せる、気鋭のアーティストたち

Katsurao Collective 2022-2025 活動報告展 開催中！

4か年にわたって、アーティストによる滞在制作プログラム「Katsurao AIR」や地域の素材を楽しむワークショップ「かつらお企画室」を展開してきた Katsurao Collective。その活動の集大成となる報告展を、1月12日(月・祝)まで葛尾村内で開催中です。

今回はじめてのお披露目となったのは、2022年滞在アーティスト 尾角典子さんの新作《かつらおステップ》と、2024年滞在アーティスト 大川友希さんの新作《ほんととその間》です。《かつらおステップ》は、葛尾村復興交流館あぜりあの壁面にて報告展後も継続してご覧いただけます。村の花であるツツジと、復興の象徴ともいえるクリムゾンクローバーを中心的モチーフとした作品です。力強いステップを踏むその姿から、あなたは何を受け取るでしょうか。葛尾村立葛尾中学校 休校中学校舎では、《ほんととその間》をご鑑賞いただけます。2024年秋の滞在時に、日山神社例大祭で「葛尾三匹獅子舞」の奉納に立ち合った大川さん。あれから1年、この作品をつくり上げ、再び葛尾村を訪ねてくれました。地域のみなさま



からご提供いただいた古着や生地が、三匹の獅子(太郎/次郎/花子)に生まれ変わった立体作品です。同じく葛尾中学校の休校中学校舎には、まさに日山神社例大祭の一日を記録した、永井文仁さんによる大型の写真集《HYAMA20241012》を展示しています。併せてご覧いただくことで、葛尾村の伝統と、それを未来へつなぐアーティストたちの取り組みをより深く体感いただけることでしょう。報告展では、葛尾村で活動した13組のアーティストたちによる累計16点の作品を、葛尾村立葛尾中学校の休校中学校舎をメイン会場として展開。スタッフ手づくりの「かつらお村アートマップ」もご用意しております。東京・渋谷や仙台での展示企画でも多くの方にご覧いただいた、葛尾村との出会いから生まれた表現の数々を、ぜひ村内で存分に楽しみなさい。

Katsurao Collective 2022-2025 活動報告展
日程：2025年10月31日(金)～2026年1月12日(月・祝)
入場無料

会場：葛尾村立葛尾中学校 休校中学校舎
(葛尾村大字落合字官ノ又141-2)
葛尾村復興交流館あぜりあ
(葛尾村大字落合字落合200-1) 他



葛尾村の日常のなかに見出す魅力

「かつらお企画室」レポート

地域に眠る素材を、参加者のみなさまと一緒に楽しむワークショップ「かつらお企画室」。今年度は、6月15日(日)の「あぜりあ市」会場内で行った「テキスタイルアート体験」で幕を開けました。講師の近あづきさんは、11月5日(水)にも横浜・黄金町で出張ワークショップとして編み機体験をプロデュース。どちらのワークショップも、村内のニット工場の残糸を使って、たくさんの方にオリジナルのニットアイテムを制作していただきました。6月29日(日)には、東京・神楽坂WM(ウム)で吉田麻子さんによる「羊の毛を織ろう!作ろう!マイチャーム」を開催。過去には葛尾村の名産羊「メルティーシープ」の毛を洗うワークショップを行っており、今

回はその羊毛を使って一点もののチャームに仕立てました。9月21日(日)には、福島県郡山市にある大正3年創業の「伏見屋ガラス店」三代目・三保谷泰輔さん&末柚さんを講師として村内に迎え、「葛尾村のガラスをつなぐ、キャンドルホルダーづくり」を開催しました。村内の元建具屋さんに眠っていた昭和ガラスを繋ぎ合わせ、インテリアに生まれ変わらせるワークショップです。きっと参加者のみなさまの自宅では、いままそれぞれの物語が灯っていることでしょう。陶芸の領域で活動を展開しているすとうともさんと須藤圭太さんは、夫妻それぞれで村内でのワークショップを企画。10月11日(土)に実施されたすとうともさんによる「てがきのもじでかけらをつくろう!～“ハネルエビ釉”で焼き上げ!～」では、参加者が思い思いの「もじ」を成形し、村内で陸上養殖されているエビの殻を使用した釉薬を使って焼き上げたものを、参加者のみなさまに後日お届けしました。参加者のみなさまがつくる「もじ」には講師の想像を超えるストーリーが内包されていたようで、驚きと楽しみに満ちた1日になりました。須藤圭太さんは、11月3日(月)に「かつらお恵みの感謝祭」会場で「カツラオコーンをつくろう!」を実施。葛尾村の全11行政区をモチーフとしたさまざまなカラーの粘土と、ニット工場の糸の芯材を使用し、他に類をみないユニークなワークショップをお楽しみいただくことができました。10月25日(土)に村内で実施したのは、



「福島県産猪皮のなめし前工程体験&レザーポーチ・カードケースづくり」。昨年度に引き続きかばん職人の片岡美菜さんをお招きし、皮が革になる過程を直接体験していただきました。今年も締めくくりは、11月30日(日)に実施した年末恒例の「もじりワークショップ」。いつもの会場では入りきらないほどたくさんの方々にご参加いただき、大きな村民会館で実施するほどの盛況ぶりでした。地元のお父さんたちを講師に迎え、地域子どもたちや村外から参加する大学生、4年連続での参加となるリピーターなど、じつに多様なみなさまが集って「もじる」技術を未来につなぎました。「かつらお企画室」に共通するのは、葛尾村の何気ない日常に眠るものごとを、アーティストやクリエイター、村民のみなさまと一緒に拾い上げ、楽しみ尽くすということです。扱う素材やできあがるものは毎回異なりますが、そんな「楽しむ姿勢」が思い出と一緒に心に残っていれば、これほど嬉しいことはありません。



▶ おわりに

地域でのアートの取り組みは、そこに生きる人々との関わりによって育まれています。Katsurao Collectiveの活動も、もちろん例外ではありません。葛尾村移住・定住支援センターを中心に村内各地で配布されている「村の日記のような物語」を綴った冊子『りりりり』では、地域のみなさんがどんな思いで、どんな感覚でアーティストなどのいわゆる「よそ者」を受け入れているのかを垣間見ることができます。ぜひ併せて手に取ってみてください。

私たちスタッフもまた、葛尾村のひとりひとりに宿る創造性や生きる力が、アーティストたちの活動によってあらわになるさまに何度も立ち会いました。アーティストたちの好奇心に寄り添い、手を差し伸べてくださるみなさまに、改めて感謝申し上げます。立場を超えた対話と協働が、うねりのように広がる未来へ向けて。葛尾村での次なる展開に、ぜひご期待ください。





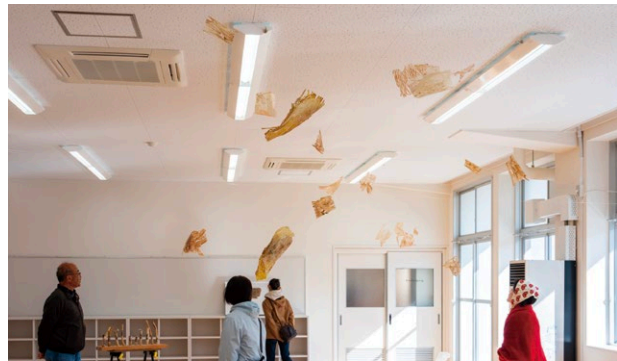
Autumn

10月からは、3名のアーティストが活動を行いました。

活動報告会は10月31日(金) - 11月3日(月・祝)の4日間。

最終日には村内で「かつらお恵みの感謝祭」が行われ、賑やかな一日となりました。

点在する仕草、浮遊する愛



伊藤夏実さんは、パッチワーク教室のみなさんが手を動かしながら交わし合うコミュニケーションに関心を寄せ、制作を行いました。インドネシア・西ジャワでのアーティストインレジデンスで学んだという、叩き技法で樹皮紙をつくる方法を、村内に生育している桑の木を使って挑戦。地域の方にいただいた蜂の巣から蜜蝋を抽出し、樹皮紙と組み合わせることで、人の体温のあたたかさによって変形する素材(メディウム)を実現しました。活動報告会では《To beloved constellations / 愛しき星座たち》と題して展示を構成。手の仕草を紹介した慈しみ合いと、その時空を超えた普遍性を、空間いっぱい作品を散りばめることで星座のように表現しました。



川遊びの記憶に 彩りを添えて



大阪と大分・別府の2拠点で活動する下浦萌香さんは、かつて村内の川を堰き止めて作られていた手づくりのプールに関する聞き取りを実施。当時の学校教員によるユニークなメモ書きとともに保存されていた記録写真を手掛かりに、かつての川遊びの様子に迫りました。聞き取りの過程で、よそ者と地域の方々とのコミュニケーションのあり方に思いを巡らせた下浦さんは、手を動かしながら時間を共有できる手法として、採取した植物から絵の具をつくるワークショップの先行研究を併せて実施。ふたつの取り組みがゆるやかに交わる報告となりました。



日常をちょっとヘンテコに 捉えてみる

大学院で彫刻を専攻している齊藤美帆さんは《たにあいのむらで井戸を囲む》と題し、中学校舎の美術室内で作品を展開しました。曰く「身の回りの風景にあるもの」をモチーフとし、それらを「少しヘンテコな姿に変身」させたといいます。見覚えがあるような、ないような。よく知っているような、ぜんぜん知らないような。葛尾村らしいような、そうでもないような——。日常のなかの些細なワンシーンを基点に、これまでになかった手法で「葛尾村ってこんな場所かも」と気づかせてくれました。

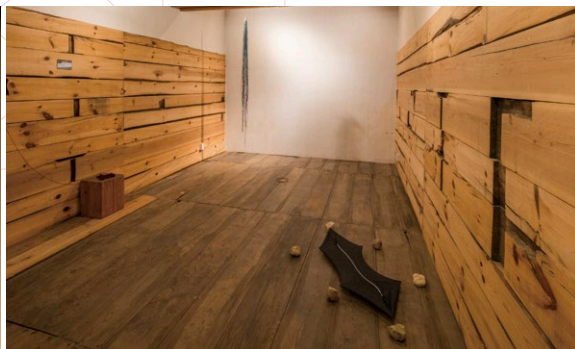
光が染みる、ここにしかない絵画



フランス・ルーアンで長く活動が続けている茨城県出身の犬丸曉さんは「手で触られる光、精神を照らす光」を模索し、絵画作品を制作しているアーティストです。葛尾村での滞在では、名産の郷土食「凍み餅(しみもち)」に使用されるオヤマボクチ(ごんぼっぱ)に着目し、葉の色や形を和紙に写し取る技法を続々と試みました。活動報告会では、鑑賞にやってきた地域の方から、稲わらの縄で吊るした自家製の凍み餅の提供を受け、さらなるインスピレーションの源になりました。葛尾村での新しい発見が、フランスでの作家活動にもすばらしい影響をもたらしてくれそうです。

Katsurao AIR 2025 活動報告会

「Katsurao AIR(カツラオエア)」は、葛尾村にアーティストやクリエイターが滞在し、
リサーチや制作を行う
アーティスト・イン・レジデンスのプログラムです。



糸と音から、場所の息づかいをひらく

布、糸、染色、そして環境音などを用いて制作活動を行っている松本実季さんは、葛尾村で暮らす中で、構造物を覆い尽くすような葛(くず)に目を奪われたといいます。長い葛を山の中から採取し、発酵させて川で洗うことによって糸をつくりました。活動報告会の会場となった葛尾村復興交流館あぜりあの蔵には、手づくりの葛の糸のほかに、ニット工場にいただいた糸や生地、村内の各地で収録した環境音などを展示。手間ひまをかけて丁寧に集められた葛尾村の〈現在〉は、逆説的に今ここにない〈過去〉や〈未来〉を照射しているようでした。

村を歩く、その道を写し取る

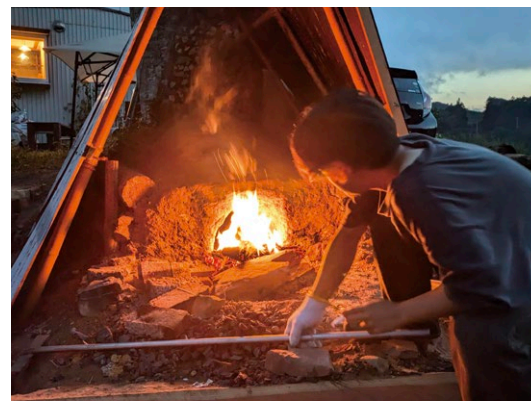


制作を生き物としての営みと捉えて活動が続けているかねこもえさんは、「歩く」という人獣共通の行為をテーマに葛尾村での日々を過ごしました。和紙の原料である楮(こうぞ)で自身の足跡と土地を型取ったり、歩きながら手元でかき編みを繰り返したり。さまざまな手法で「歩く」という行為を記録し、活動報告会でその成果を公開しました。村の動物たちとの触れ合いを楽しんだ一方で、歩いていると人によく声をかけられたというかねこさん。滞在制作ならではのコミュニケーションから、生き物をめぐる思索がより一層深まった1か月間となりました。

土着の技術で、 新しい文化をつくる

2024年度にはじめて葛尾村で滞在制作を行った杉山仁彦さんは、この地に新たな陶芸の文化を立ち上げるべく「葛尾焼き」の構想を深めました。セメントでできた耐火レンガで陶芸窯の制作をはじめようとした杉山さんですが、遠藤英徳さんら地域のみなさんの勧めと協力を受けて、野川地区の「Cafeしずく」に土窯をつくり上げることに。この地に根付く炭焼きの技術が、現代の新しい文化創造と結びついた瞬間でした。

今夏滞在し陶芸の取り組みを行ったプロダクトデザイナーくもそらとさんも活動に加わり、葛尾村の土を使った陶芸の試みが前進した3週間となりました。



Youth Program

9月は若手アーティスト4名が活動を行い、
9月20日(土) - 23日(火・祝)の4日間にわたって
活動報告会を実施しました。

活動アーカイブ 配信中!

滞在中に収録したアーティストインタビューの様様やこれまでの活動のアーカイブは、「note」「YouTube」「Spotify」他 各種オンラインサービスにて配信中です。本紙に掲載しきれなかった裏話も盛りだくさん!ぜひ覗きにきてください。



note



YouTube



Podcast